

として持出された。このような公私混同が悪評を招き、仙台城本丸破却者などと誤まり伝えられることになった。翌6年転出。岩手・青森等の地方官を歴任。晩年は群馬県邑楽郡長となった。字は有隣、通称甲介、謙堂と号した。大正7年5月歿、84才。

注(15) みよししげおみ。長州人。高杉晋作の奇兵隊に参加した。明治4年陸軍大佐に任ぜられ、東北鎮台司令官となり、明治7年まで在任した。仙台城本丸の建物を破却し、城壁を一部取崩し、城内の樹木を濫伐した。後に陸軍中將に昇進し、子爵を授けられ、枢密顧問官に任ぜられた。明治33年歿、61才。

資料 伊達家史叢談卷之5 (伊達邦宗)
仙台市史第3巻
仙台城 (仙台市文化財保護委員会)

87 「冥想の松」か「瞑想の松」か

問 台の原の樗牛の松のことを「冥想の松」と書いてあるものもあるし、「瞑想の松」と書いてあるものも⁽¹⁾見ます。一体、どちらの方が正しいのですか。

答 先ず最初に、「冥想」と「瞑想」との差異を明確にして置くことが必要であります。前者の「冥」の文字は、「冫」〔べき。覆う〕と「日」〔太陽〕と、「六」〔りく。陸。地〕とで合成されたもので、日が地に入ったのを更に覆った状態をあらわし、「暗い」→「深い」→「心思深奥」の意味をもつものです。後者の「瞑」の文字は「目」と「冥」の2字の合体で、「目を閉じる」その結果「よく見えぬ」→「暗い」→「眠る」→「安心して死ぬ」の意味をもつものです。両者の差を端的に示しているのが、「頑冥」「幽冥」「冥土〔途〕」「冥想」などと、他方「瞑目」「以て瞑すべし」などの熟語または用法であります。近来「冥想」も「瞑想」も混同して通用していますが、厳密にはニュアンスが違います。「冥想」の方は、精神活動すなわち深奥な思索が主体となり優先することです。その結果として目を閉じる身体的動作が附随することはあり得るが、それは必ずしも大した問題ではありません。一方の「瞑想」は、「瞑」そのものが「目」+「冥」の合成文字なので、2字それぞれ完結した意味をもつもの同志なので「瞑想」は「目+冥+想」→「瞑 and 想」となって、熟語としての熟成度が高まりません。目を閉じるという身体的動作が不可欠の初動として先行し、しかる後に思惟するという精神活動が作動する二挙動性があり、意味のウェイトが「想」よりも比較的「瞑」の方に多くかかりがちな語であります。中国は勿論、わが国においても、辞書はもとより然るべき典籍で見られるのは「冥想」の方であって、発音の同じな「瞑想」の表記を見

出すことはできません。言葉の純粹な正統性からしても、また高山樗牛の精神性の非凡な高さに最もよく適合するものとしても、「瞑想」よりは「冥想」の表記を正しいとすべきであります。

次に、固有名は尊重されなければならないものであって、第三者の無責任な改変は加えてはならないものであります。樗牛松が「冥想の松」として文字通り確定したのは、昭和16年6月1日、この松の根方に建てられた記念碑に刻んだ、

(2)
いくたびか
ここに真昼の
夢見たる
高山樗牛
冥想の松

土井晩翠の歌であります。更に、昭和17年2月晩翠が作詞した「東北薬学専門学校〔現東北薬科大学の前身〕々歌」の冒頭『天才樗牛の冥想松を 見上ぐる丘上基をおける……』等であります。漢学の素養の高かった晩翠が「冥想」の熟語をとったのは流石です。高山樗牛が仙台に在ったのは、明治22年から26年までの旧制第二高等学校生徒時代と、明治29年から僅か1年半程の二高教授としての短期間に過ぎませんでした。その樗牛が台の原を散策し、この孤松のもとで冥想にふけたのだと伝えられます。明治20年代における樗牛のこのような行動の真偽を確かめる資料は一片もありません。それに、明治時代の二高校舎は片平丁にあり、その生徒や教官が当時甚しく草深かったこの辺まで足を伸したかどうか甚だ疑問でもあります。それは、後年になってから、最も巨大な先輩樗牛を崇拜する、多感な旧制二高生の間に、いつとはなしに生れ育った伝説であるといわれます。その文献初出も、旧制第二高等学校の「尚志会雑誌」第100号に掲載された随筆「台の原」〔進藤竹次郎、大正3年卒業、東洋紡績重役となった〕に求めることができます。その文中に『射的場の尽きる処からまた丘陵となって、右手の丘の頂上には、三抱へもある松の老木が、大蛇のやうな根を広げて聳えて居て、何時の頃から云ひならしたのか、「樗牛冥想の松」と呼んである……』とあるのがそれです。ここに「冥想」の語を正しく用いているのは、旧制高校生の教養の高さ、或いは当時の一般の漢字力を示すものといえましょう。以上のことから、固有名としても「冥想の松」の表記が、本来正しいものであります。なお、「宮城県史」第15、16巻「仙台市史」続編第2巻・「仙台の文学散歩」（仙台市教育委員会編）・「滅び行く伝説口碑を求めて」第1輯（富田広重、「宮城県の伝説」と改題して昭和54年復刻版発行）・「みやぎの観光要覧」（宮城県）・「杜の都名木・古木」（仙台市公園協会）・「仙台市バス路線名」等「瞑想の松」の表記をしているものを多く見かけます。漢字の使用が乱れた時代ではありますが、実地実物を軽視し、厳存する固有名から遊離した不用意さは、是正されなければなりません。

注(1) たかやまちょぎゅう。評論家。本名林次郎。明治4年〔1871〕山形県鶴岡に生れた。

明治22年旧制二高に入学、26年東大哲学科に入学、その年末に書いた歴史小説「滝口

入道」が、翌年読売新聞の懸賞で一等となり、一躍文壇にその名があがった。明治29年母校旧制二高の教授となったが、一年半程で辞職して上京した。「太陽」を主宰する傍ら、早大・東大等に出講した。樗牛は文壇・評論界に万丈の気を吐き、国家至上主義から個人主義に転じ、後には日蓮の研究に没頭するなど、鋭敏な天才だった樗牛の思想成長は、日清戦争後における時代思潮の変遷を示すものであるといわれる。本質的に詩人であったために、思想態度の矛盾や非論理性があると批判されるが、樗牛が時代に与えた影響は著大なものがあった。明治33年文学博士の学位を授けられ、文部省からヨーロッパ留学を命ぜられようとしたが、不運にも病気のため実現せず、35年12月24日、32才の若さで湘南の地に歿した。樗牛の旧制二高在任は極めて短期間であったが、二高生たちは後々まで、樗牛を偉大な先輩として畏敬し、その無形の感化を永く受けついできた。

注(2) 建主は、当時の萱場製作所長萱場四郎である。この歌碑が建てられたのは、先輩樗牛を敬愛する土井晩翠の努力によるものであった。昭和15年〔1940〕萱場社長が、台の原一帯を地下工場とするため買収し、この松は伐採される運命にあった。このことを耳にした晩翠は、直ちに樗牛ゆかりの松を保存するよう萱場社長を説得した。萱場社長はこれを快く承したばかりでなく、記念碑を建てて一層手厚く保護することを確約した。碑石は広瀬川の自然石、歌は晩翠の作、書は評論家として樗牛と親交のあった笹川臨風である。昭和16年6月1日、晩翠・臨風はじめ2百名以上の臨席者の中で、碑の除幕が行われ、仙台の新たな名所の一つとなった。昭和28年12月19日、東北薬科大学が創立25周年を記念し、冥想の松を含む附近1万坪を校地として購入した。

注(3) どいばんすい。正しくはつちいばんすい〔土井は代々の屋号土屋に因んだ姓である。〕。明治4年〔1871〕10月23日仙台北鍛冶町に生れた。本名林吉。旧制第二高等学校を経て、明治30年東大英文科卒業。明治32年処女詩集「天地有情」を出版した。同年母校教授となり、「晚鐘」（明治34）・「東海遊子吟」（明治39）等の詩集を出版した。晩翠の詩は30年代前半に、島崎藤村の詩と並び称された。その詩は男性的な漢語を多用し、その格調の高さが明治の青年層に愛誦され、寮歌・校歌等で晩翠の作詩したものが全国的に断然多かった。藤村に見られるような後進への影響も少く、詩人としては一步を藤村に譲るが、新しい国詩要求の一面に応えた詩人として、藤村にない詩風を完成した。昭和24年5月2日仙台市名誉市民に推戴され、翌25年文化勲章を受けた。昭和27年10月19日82才で歿した。新寺小路大林寺に葬る。

注(4) 「宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告」第3輯の内「仙台市北部に於ける切支丹其他の遺跡」（阿刀田令造）に次の記事がある。「台の原に孤松がある。樗牛冥想の松と名を以てから年久しい、つまり年久しく何人もそのものに疑を挟むなきに至れる比〔ころ〕、独断に馴〔な〕れた人が現れ来りて、それに裏書を試みるものである。自今疑ふことを許さな

いと厳命するのである。この松は恰度〔ちょうど〕この時期に際会してゐる、臆〔やが〕て歴史家なるものが悪魔に憑〔つ〕かれた人の如くにして来り疑惑の目を睜〔みは〕りつつこれに対して考証を開始する、ついで事実相違、信拠するに足りない、樗牛が一度も其の下に立ったことがないと叫び、得意の鼻をうごめかす、然るにここに現実を以て生活の一部と思念し、より広い世界を恣〔ほしいまま〕にしてゐる青杉子〔せいしんし〕というものがある。これは右の考証をひどく迷惑がる。そして依然として冥想松と親しげに呼ぶこの青杉子は松の南に鎮座せらるる、旧天神をも見逃さない、樗牛はこの天神に詣でそれより松下に佇立するのが常であつたといふ、これがそのまま信ぜられて数年続く、歴史家が再び現れ来り天神と松とを結びつけた処置を怒り必ず狡獪〔こうかい。悪かしていこと〕言語に絶すと怒号すべし、然し樗牛が忘れられない限り、仙台に学んだことが彼にとりて意義があつたと世人から見られてゐる間、この遺跡は決して亡びるものでない、松が枯れても代りの松が植えられるに定〔き〕まつてゐる。』

注(5) 「仙台の文学散歩」(仙台市教育委員会編)に、『吾人は須〔すべか〕らく現代を超越せざるべからず』と喝破した先輩の遺風をしたう二高生は、この台の原の丘を「光の谷」と称し、未来に高い理想を懐いたのである。』とある。

「郷土研究としての小萩ものがたり」(藤原相之助、昭和8年刊)に『今もその丘陵上の松を天神松、一本松といひ、近年若い人の中では高山^{××}樗牛^{××}冥想の松などと云てます。』

注(6) 「宮城県史」第15巻に次のように記されている。『^{××}樗牛^{××}冥想の松(一本松) 所在地、仙台市台ノ原天神山、樹種、アカマツ。地際幹囲、3.78m。地上1.5m 幹囲、3.06m。樹高、14.4m。枝下、6.05m。推定樹令600年。現状、伝説、樹勢旺盛で濃緑の枝葉が繁茂している。文豪高山樗牛が第二高等学校生徒の時、いつも樹蔭に坐して^{××}冥想にふけた孤松だとして、若き学徒の憧憬をもつ大きな存在である。慶長の初め国分彦九郎盛重が天神社の霊地を穢さぬため、記念として植えたものと伝えられている。』

資料 大漢和辞典(諸橋轍次)

高山樗牛冥想の松(成田正毅)

冥想の松の碑(「思い出の土井晚翠先生」(成田正毅)の内)